

はじめに

大震災から、すでに九ヶ月が過ぎようとしています。六〇〇〇人以上の尊い命が奪われました。戦後五〇年、空襲の焼け跡から一步一步築き上げてきた私達の財産も、一瞬のうちにガレキと化しました。

改めて自然の巨大なエネルギーに震憾させられるとともに、自然と共生し、人の命や財産を豊かに育てていく街づくり、都市づくりの大切さを痛感しました。

今、私達は、一日も早い復興をめざして、日々の教育活動に励むとともに、さまざまな運動にも取り組んでいます。その一環としてこの冊子を編集しました。震災直後から私達を励まし、勇気づけてくれた全国の私学の皆さんの好意に、少しでも応えるためのものです。

失ったものは大きいですが、その中から何を得て、何を伝えていくかは、生きていく私達の務めだと考えています。兵庫の私学に携わる私達が、その置かれた場の違いはあれ、精一杯動いた思いを理解していただければ幸いです。

あらためて全国の皆さんの支援に感謝します。

一九九五年十月

兵庫県私立学校教職員組合連合

執行委員長 井山和重

一月十七日

神

戸

一月十七日午前五時四十六分

「地震だ」

僕は大声で「ウワァッ」と叫んだ

その声は、周囲の崩れ落ちる音に消された

「大丈夫か？ 母さん」

母は冷静だった

「ガス、ガスを止めて」

父も弟も妹も無事のようにだった

「早く！外に逃げるぞ」僕は叫んだ

玄関までが遠い

通路に散乱した物が僕たちを阻む

必死で下駄箱と本棚を起こした

ドアに手をかけた

と、大きな余震だ

今起こしたばかりの下駄箱と本棚が僕の上に倒れて来た

痛みは感じない、恐怖に足がすくんだ



外はおそろしく静かだった

空気が乾き咽喉が焼けるようだった

強烈なガスのにおいが鼻をついた

脅え切った人々が集まっていた

いたる所で火が上がっていた

「家の中にまだお母さんがいるんです、誰か助けて下さい」

水の出ない消防車

為すすべもない人々

呆然と突っ立つ僕らの前を

火事で焼かれた人が畳に乘せられて来た

まさに地獄

僕は、人間の自然に対する無力さを感じ続けていた

十七日はこうして夜になった

いつもは夜景で美しい神戸の街が真っ暗になった

コンクリートやアスファルトの塊でできた森のようにひっそりと静まり返った

信じられなかった

神戸の街は

叩きのめされ破壊されて僕の目の前に横たわっていた

神戸弘陵学園高等学校二年生 中川 勝治

追記

地震から約五か月、僕は未だに全壊の家にてこの原稿を書いている。

僕には夢がある。芸大に行きイラストレーターになることだ。あの地震により一度は諦めた夢に向かって、前にもましてがんばっている。

僕は、この地震で多くのものを失ったが、それ以上に得るものも多かったように思う。この壁を乗り越えられた時、自分の夢が叶うような気がしている。

それは一月十七日
から始まった



も く じ

はじめに	1
一月十七日 — 神戸	2

学校はどのように対応したか

学校を避難所に開放して	6
チームで早い対応をした教師たち	8
混乱の中から一学校復旧への第一歩—	9
人間と自然—震災を修学旅行先で知って—	11
◆うれしかった救援物資、困った救援物資	13

地域に飛び出した教師と生徒

消防服での救援活動	16
私のボランティア体験	18
死ぬということの怖さを体験して	20
◆ボランティア活動に参加して	22
◆ライフラインが寸断された中でのちょっとしたアイデア	

子ども、親の願いを実現するために

輸送ボランティアをして思ったこと	26
「学費が払われへん」	27
被災生徒の教育権を守るとりくみ	30
—神戸野田高校における授業料軽減措置—	
◆避難所、仮設で生活をしてる人（6月現在）	33

資料 各学校の被害状況など

学校を避難所に開放して

私が、ようやく出勤したのが、地震発生から三日目の一九日の朝のことであった。自宅の明石から学校のある長田区に近づくにつれ、目を覆いたくなる光景がつきつぎに飛び込んでくる。傾いた家屋の隙間から壊れたテーブルやタンスが見える。二日前には確実に暖かな家族の団らんがあつたのだと思うと、胸が締めつけられた。目頭が熱くなるのをこらえ避難する人々、援助に向かう人々でごった返すなかを急いだ。

私が到着したとき、すでに学校は避難所となっており、本校の教職員が一〇名ほどの人数でその対応に追われていた。避難者の数は約四〇〇名で、比較的小規模の体育館と会議室は肩を寄せあう人々であふれていた。

本部となった事務室をのぞくと、そこには、避難者名簿がおかれていた。聞けば、その名前にもとづいて避難者は、七班にわかれており、それぞれに班長が決められているという。また、「避難所の運営は基本的に避難者自身であたり、本校職員はそれをサポートする」「学校に対する要望は、代表者を通じて本校職員に伝える」という、避難者と学校側との基本的ルールもすでに確立されていた。



避難所になった学校での“安否メモ”がぎっしりに。

そのためか、初日こそ食料の不足から混乱もあつたようだが、以後は統制のとれた避難所運営が可能になったようである。当時は、それほど特別のことのように感じ

ていなかったが、後に近隣の避難所での混乱ぶりを耳にするにつれ、いち早く名簿づくりに着手し、避難者の自治を促す対応をとった、当時の教職員の功績がいかにかきいものであったかを実感した。

そのほかにも、がれきに埋もれた人を掘り出し人工呼吸をほどこした教師、自宅が全壊したにもかかわらず駆けつけた教師、避難者とともに区役所に向き、食料や水の配給要請に奔走した教師、消防署に救急車の要請に行く教師など、地震直後に駆けつけた教職員達の奮闘ぶりにはめざましいものがあつたことを後に知らされた。

ライフラインについては、一九日に電気が通じただけで、依然として水道、ガス、電話は途絶えていた。トイレの問題も深刻であつた。二〇日にポンプの手配ができ、学校の地下水を使用できるようになるまでは、教職員と避難者とで近くの川に水洗用の水をくみに行き、対応した。灯油や食料、救援物資が必要量届くようになったのもこの頃であつた。

電話の回復は、二二日頃であつたように記憶している。電話回復後は避難者の安否確認の電話が殺到し、その対応に追われたが、その合間をぬい、しらみつぶしに生徒への安否確認を始めていった。

学校業務については、二二日頃までは満足に行える状況でなく、もっぱら避難所業務が中心であつた。これには、教職員のなかにも被災者となつた者も多いため、出勤可能な者（一〇／二〇名）が、日直六名、宿直五／六

名で対応した。

二三日、震災後初めて職員会が開かれた。この頃からほとんどの教職員が出勤可能となり、少しずつ学校再開に向けての準備が始まった。避難所の方も不自由ななりに落ち着きのあるものになっていった。さらに多方面からボランティアが集まってくれたことにより、学校業務と避難所業務を並行して行える体制が整っていった。交通手段などの事情で、生徒の登校が実現したのは、二月七日のことであつた。ただし、これは、本校以西の生徒に限られたことであり、交通網の寸断された東方面の生徒は、翌日の八日に西宮球技場に集めた。

鉄道の部分復旧が進み、乗り継ぎバスの利用で登校が可能になったのを見計らい、一三日より一〇時から一二時までの三時間授業が再開された。卒業式も、二一日に早められ、体育館の避難所の方たちに見守られながらグランドで行われた。

こうして、一月一七日の震災の日から四月七日の避難所解消の日まで、私たちと被災者の二人三脚の学校生活が続いた。教師も生徒も避難者も、この三か月、まさに悲惨な生活を体験した。しかし、その中でボランティアに駆けつけた献身的な若者の姿、見ず知らずの人に手をさしのべる姿、全国から寄せられた援助物資や義援金を目の前にして、失いかけていたものを思い出したのも事実であつた。

チームで早い対応をした教師たち

一月二七日の職員会議はほとんどの教師が集まった。

地震直後からの経過説明、生徒の状況説明の後、今後の学校としての対処について話し合いが持たれて、緊急措置として次の四チームの編成が決まり、職員会議のあと、直ちに活動を開始した。

一 支援対策チーム

(被災生徒の学校生活を可能にするために)

① ホームステイ係

被災生徒を預かる家庭を募ることや学校の合宿所の開放などを検討

② 支援物資係

卒業生、在校生に対する制服やカバン等の提供の呼びかけ

③ 義援金係

保護者、卒業生に募金協力の呼びかけ

④ 被災状況把握、データ収集係

二 学校再開チーム

(臨時の学校形態の検討)

① 学校再開期日と授業編成の検討

生徒の登下校状況調査をして、授業開始期日、登

下校時刻、時間割の決定

② 登校困難生徒対策

登校困難生徒のため校外での臨時教室の設置

三 家庭訪問チーム

(登校日に来られなかった生徒に、家庭や避難所等への訪問実施)

四 登校日準備チーム

生徒登校に備えて、安全の再点検、トイレ使用準備、余震に対する避難マニュアルづくり等

以上の四チームがつくられた。しかしこれらははじめから決まっていたのではなく、希望にしたがってチーム分けをして、そこでチームリーダー・書記なども決まり肉付けされたものである。

チームの活動は三月末までを区切りとしたが、支援対策チーム等は九五年度一学期末までも活動が続いた。

一月一七日から、当日の集まった教職員での集会、二〇日の緊急集会、二七日の職員会議へと至る中で、「何を学校としてしなければいけないのか」が全教職員の命題であった。それが達成できた要因として、四チームに

も自然にバランスよく分かれて活動できたこと、常に生徒の安否情報確認を第一義に学年、担任が取り組んだこと等があげられる。又、四つのチーム以外にも校内の施設の安全点検、修理のチームや生徒や交通の状況等、学校に集中する情報を整理提供したチーム、ひっきりなしにかかる電話の応対をしたチーム等、目立たずに活動し

たチームがあったことも忘れられない。
全体として学校を支える大小のエネルギーが有機的に連つて活動を展開したが、チーム間の連絡や平常化に向かう中で、本来の校務運営との関係が問題になったことを付記しておく。

松蔭女子学院 友岡 睦

混乱の中から——学校復旧への第一歩——

「カタコト、カタコトカタ」隣の教室からチョークの音。先生の声もここからはっきり聞き取れる。私の教室では単語の小テストをしている。歩くと床の音。仮設校舎での授業は、今でもなにか落ち着かない。「何でこんなところで授業をしているんや。」毎日学校に来る度に震災の被害の大きさを感じずにはおれない。

一月一七日昼前、自宅が全壊した私は、妻と子をつれて芦屋の実家へやってきた。学校が心配になり、実家を出ようとすると同僚の先生が私たちを気遣いやってきた。互いに無事を喜び合った後、「今から学校行こうと思うんやけど。」という「行かん方がええで。学校、メチャメチャや。」と涙ぐんでいる。

数分後学校に到着した。愕然とする。校舎の鉄筋の支

柱はことごとく破損し、壁が抜け、天井が落ちているところもある。言うまでもなく室内は異様な有様である。甲南中高は、大阪湾を見渡す眺望の良い芦屋市の山手に位置する。しかし、この日の眺めは、あちこちで煙が上がる恐ろしい眺めであった。

数日後、教員会議が開かれる。が、出校できた教員は半数ほどだった。生徒二名の尊い命が奪われた。あまりのショックに全身から力が抜ける思いだった。のちに教員は数班に分かれ、学校再開へ動き始める。使用可能な教室に本部が設置され、生徒の安否確認・登校日等の連絡、入試の日程変更、被害状況の調査、甲南大学推薦者判定会議、仮設校舎建設への準備等あわただしく時が流れた。

二月中旬頃から大グラウンドに仮設校舎（計一〇棟）

の建設が始まる。本校のグラウンドは大小二つあるが、平成六年三月に全面改修を終えたばかりである。そのグラウンドに仮設校舎が建つのは何とも言い様のない事態であった。仮設校舎は新学期を迎えるまでに完成し、新校舎完成までの約二年間使用される予定である。

生徒達には三学期の授業の代わりとして、各教科ごとに課題が出され、それを評価して学期の成績とした。また、三月中頃より、使用可能な講堂建物内の特別教室を使って補充授業が行われ始め、仮設校舎が完成していくのに伴って、教室は仮設校舎へと徐々に移された。補充授業は三月後半の五日間の春休みを除いて、四月の入学式直前まで行われた。授業の遅れ、特に大学進学を控える新高三生の学習を考慮しての授業であった。



グラウンドに仮設校舎をたて、授業をしている甲南中高

仮設校舎での新学期の授業は当初九時三〇分始業の四〇分授業で行われた。通学のための交通機関が整っていなかったからで、六月下旬になってやっと八時三〇分始業の平常授業に戻すことができた。カリキュラムの面では、カリキュラムの再編、「情報」「LL」等の授業の内容変更等、教務課の教員が多くの労力を費やした。体育の授業もグラウンドがほんの一部しか使えないため、体育館を中心に行われている。授業の遅れはなかなか取り戻せない。時間に追われた余裕のない授業をどうしても強いられてしまう。授業の進度を上げざるを得なくなる教科も出てくる。とにかく四〇分授業ではきつい感じであった。

教員室はスペースの関係で、主に学年ごとに四室に分かれている。スペースがないものだから、授業に必要な小限の物しか置く場所がなく、狭苦しい思いの毎日である。会議室がなく、教員会議などは特別教室や応接室を使っている。

生徒達も大変である。元気いっぱいの中高生の男子が、狭い校舎に押し込められているわけで、フラストレーションがたまっているように感じられることもある。特に屋外で活動する運動部（野球・サッカー・ラグビー・ホッケー・陸上・弓道等）の生徒達は、練習場所が制約され、やる気を失っている生徒も出てきている。各部の顧問は使用可能な小グラウンドの使用割り振り、他校との合同練習や合宿場所の手配など、対応に追われている。

こうした環境の中、震災からあわただしく約半年が経過した。疲労で体調を崩しきみの教員も出ている。新校舎が完成し学校が正常化するのはまだまだ先のことだが、

焦らず、「ぼちぼち」と一日一日を歩んでいきたいものだ。

甲南高・中学校 橋本 昌洋

人間と自然——震災を修学旅行先で知って——

一月一七日、修学旅行で北海道に来ていた私は、午前六時に起床した。友人に「テレビを見てみる。」と言われスイッチを入れてみた。寝起きの私には一瞬訳が分からなかった。高速道路が横倒しになり、見覚えのある建物にはビビがいき、家というよりむしろ「ガレキの山」がそこには写っていた。チャンネルを変えると、近畿の地図に数字が書いてあり、アナウンサーが繰り返し同じ事を言っていた。地震があつたのが分かり、同時に家族のことが気になり電話をかけにいった。一度目は電話が呼び出し音を発せず焦つたが、二度目で運良く呼び出し音になり、すぐに姉が受話器に出た。「家の人は大丈夫だった?」「大丈夫よ」「家は?」「風通しが良くなった」と言われたから私は、窓ガラスが割れたぐらいだと勝手に考えてしまった。後にその考えは甘かったと痛感する。

心配がなくなった時に、私はどうして自分だけが北海道に在るのだらうと思った。それは高校生活最大の行事

であろう修学旅行だというのは明確だったが、こんな時にという思いでひどく自責の念のないならだちを覚えた。学校はこのまま行事を続行するという方針だった。家族も家も大丈夫だったし、と思って特に何も考えずに行事を続けていた。スキー実習だったので、夕方からは疲れて部屋に戻るが、テレビの情報には耳を傾けた。死亡者の氏名が読まれるのを、聞き覚えのある名前はないか、と聞いていたが、今のところはないようだと安心する。

帰る日が近づいたころ、食堂に全員集合したとき、ニセコ町の皆様から救援物資をいただいた。その時、私は本当に地震があつたというのを感じた。それまでのテレビの映像はテレビだけの世界のように思え、客観的にみている。そして、ニセコ町の人に感謝をした。

帰る日が来た。その日は気分が重く、身体も疲れていたこともあって帰るのがいやだった。その反面一刻も早く帰りたいとも思っていた。

もうすぐで関西国際空港に着く。どんよりと暗く厚い雲をつきやぶって飛行機がおりていく。

着陸した後、私は異様な雰囲気を感じた。それは、TV局の人々がいて私たちが取材されるというものだった。別に私たちは何もしていないのに、神戸の高校生であるというだけで取材されるのは、私自身腹立たしく思えた。

解散するとき、身内の人と連絡がとれた人、確実に家に帰れる人が本日解散、残りの人は明日、家に帰るということになっていた。私だけではないだろうが、一刻も早く家に帰って家族と再開したいと思った。そして何とか連絡をつけて、西宮北口まで帰ることとなった。阪急電車に乗って西宮北口まで私は帰った。電車の中で私は本当に地震があったことを痛感した。それというのも乗客がほぼ全員、TVに写っていた格好をしていたからだ。リュックサックを肩に掛けて、水の入った容器を手に持ち、表情はいくぶん疲れたような悲痛な顔をして……車内全体が暗く感じた。

車窓はというと、被災地に近づくにつれ街灯が消え、ネオンが消えていた。

ホームに降りた私は、構内で親が待っているか探したが、いない。急に心細くなって周りを見回した。駅自体はさほど傷んではいなく、ただ天井のガラスだけ割れて一部なくなっている。駅を行き交う人は皆早足で、それが私をより心細くした。

連絡の行き違いで数時間後に親と会えた。「トイレに

行く」といつて私はトイレに行った。そこで初めて水のないことに気がついた。TVで聞いて知ってはいたが、TVの情報に半信半疑であった私は突然TVの中の出来事から、現実へと一気に来てしまった気がした。

親の車に乗り街の風景をみた。車のライトに光るガラスの破片と地割れの跡。街灯に照らされた家とは呼べないガレキの山。それらを見たとき、言い知れぬ恐怖を感じた。

家の近くまで来たとき、街灯は一つもなく懐中電灯の光にたよって家に帰っていった。しかし、我が家は週間ほどで完全に変わっていた。壁が落ち、中が見える。

「たしかに風通しが良くなったな。」としか思えなかった。それ以外の感情がわからない。何も感じない。ただ茫然としていた。

その夜は、祖父の家に行きジャージを来て眠った。

翌朝、水もガスもないので不便を感じたが、洗面を済まして街へ出た。それは私の知っていた街の風景ではなかった。

そして、もう一度我が家を見に行った。やはり昨夜と同じだと思った。昨夜よりひどくなった気がした。明るい分、細かいところまでよく見えるからだろう。

その時、私は人間とはなんて無力なんだろうと痛感した。自然の前には人間の浅知恵なんて役にも立たない。そして人間の物欲をも一瞬にしてくずし、パニックにおとし入れる。自然災害は忘れたところにやってきて、その



存在を再確認させる。時には生命も奪って……。しかし、その中で人は生きていかなければならない。

自然災害は、いつまたやってくるかも知れない。その時に人はまた助け合いながら乗り越えて行くだろう。これから神戸は、街というのにふさわしく復興していくのだろう。そして時間とともに、この地震の記憶も感情も薄れていくのだろう。しかし、災害はまた自然の存在をアピールするかのよう訪れるだろう。それはどうすることもできない。だけれどもその中で、人は少しずつ進歩していかねばならないのだろうと私は深く思った。

神戸弘陵学園高等学校三年生 大西 正倫

◆うれしかった救援物資

○震災直後

水（ペットボトル入り）、下着（もちろん新しいもの）、お茶、ウェットティッシュ、デンタルリンス、毛布、歯ブラシ、セッケンなどの日用品、カンパン、茶碗、丼碗、缶のお茶、缶ビール、洗って切ってあとは焼くだけの状態で送ってくれた野菜、インスタント食品、缶詰。

○時間経過後

レターセット、手帳、スープ、ラーメン、野菜のごった煮、シート、タオル、作業服、カセットボンベ、肉。

◆困った救援物資

カンパン、輸入缶詰、古い衣料、洗ってあっても古い下着、レトルト食品、缶切りで開ける缶詰、タンシの中を整理して捨てるような感じのもの、賞味期限の過ぎた食品類、カロリーメイト、ビタミン剤の山、お花、色紙の寄せ書き、出前の音楽会（喜ぶ余裕がなかった）、ラーメン、畑からとれたばかりの洗っていないハウレン草や野菜類。

〔兵庫県下私学の被災状況〕 兵庫私教連調査（第1次分）

1995.1.21 PM 4:30 兵庫私教連 和田

仁川（西宮市） 1/23の10時に可能な職員は集まれとの指示。生徒の死者はない。教職員の住宅の全半壊が数件。

武庫川（西宮市） 1/23の11時に教職員集合の指示。生徒の死者は現在なし。教職員の死者はなし。住宅の全半壊は4～5件。北角委員長が住む5階建てマンションが横倒しになり数名の死者。北角氏は4Fに住んでいたが外へ出たら地上だった。家族とも無事で近所の救援に尽力した。

甲南（芦屋市） 生徒は中3、高2各1名死亡。1/20職員会議。生徒は当面自宅待機。教職員で死者はなし。非常勤1名のみ連絡取れず。

松蔭（神戸市灘区） 生徒が中1、高1各1名死亡。地域の遺体安置所となっている。1/20職員会議。教職員で避難所生活者あり。死者はなし。

神港（神戸市中央区） 地域の避難所として開放。1/23に職員会議。教職員に死者はなし。但し連絡の取れない職員が2名。生徒の状況は現在調査中。

山手（神戸市中央区） 理事長が死亡。1/21に職員会議。他の教職員の死亡はなし。生徒の死亡報告はなし。現在調査中。

神戸学院（神戸市兵庫区） 教職員の死者はなし。生徒の状況は調査中。

常盤（神戸市長田区） 生徒の死者1名。他は調査中。教職員に死者はなし。住宅の全半壊10件近く。避難所生活者あり。1/23の10時に職員会議。地域の避難所に開放。

神戸野田（神戸市長田区） 生徒で高2、高3各1名死亡。教職員の死者はなし。1/23の11時に職員会議予定。地域の避難所に一部開放。

神戸弘陵（神戸市北区） 教職員に死者はなし。生徒の状況は調査中。地域の避難所に開放。

啓明（神戸市須磨区） 生徒1名死亡。教職員は死亡なし。1/23～25で生徒の連絡とる。

須磨ノ浦（神戸市須磨区） 校舎一部倒壊。新館を地域の避難所に開放。

滝川（神戸市須磨区） 地域の避難所に開放。

育英（神戸市長田区） 地域の避難所に開放。

甲南女子（神戸市東灘区） 地域の避難所に開放。

塩原（神戸市中央区） 生徒3～4名死亡。現在調査中。教職員の死亡はなし。

成徳（神戸市中央区） 生徒の状況は調査中。教職員の死亡はなし。

神戸国際大学附属（神戸市垂水区） 生徒で高2、高3各1名死亡。両親が死亡した生徒も。200名余り連絡取れていない。現在調査中。教職員の死亡はなし。

雲雀ヶ丘（宝塚市） 高2生徒1名が死亡。教職員は死亡なし。21日に8割程度の生徒が出校。23日から午前中授業開始。

姫路地区にある東洋、市川、日ノ本、賢明、淳心、播磨、日生第3などは18日ごろから平常授業に戻っている模様。

全体としてなかなか状況がつかめなかったが、ようやくほとんどの学校の状況を一旦は聞き出した段階。

教職員の死者は山手理事長1名だが、倒壊家屋からなんとか抜け出した教職員・家族はかなりある。

また、教職員の家族や父母などには死者は出ている。

生徒の死亡は、現在報告を受けているのは、甲南2名、松蔭2名、野田2名、啓明1名、常盤1名、塩原3～4名、神戸国際大附属2名、雲雀ヶ丘1名というところだが、各校で現在状況掌握中。7～9割の状況はつかめたが、まだ連絡の取れない生徒が1～3割あり、その状況が不明である。

消防服での救援活動

「ガラ・ガラ」と家が崩れ、自分の身体がだんだん海中深く沈んでいく。「これで俺の悪運もつきた……いや、あきらめたらあかん」と思ったとき、揺れが止まった。夢と現実との境界で「こりや一体なんだ」と思ったとき、自分の身体が本箱の上にあった。どのようにして本箱の上にあがったのか、今でもどうしても思い出せない。

五階建てのマンションが一瞬のうちに倒壊し、一階から三階まで押しつぶされ、自分の住んでいた四階が道路に面していた。生き埋めになっている人の「助けて」という声が聞こえてくる。すぐ近くの消防署へ行き、ヘルメット・消防服を借りてきて家族全員で救援活動にあたる。「助けてという声が聞こえるぞ」「そこに足が見えてる!」。しかしなかなか救出できない。自衛隊、消防署へかけ合ってもラチがあかない。とにかく自力で救出する以外にないことがわかった。するとこれまで同じマンションにいながら疎遠であった住人が、随分前から親友であったかのように団結し、救出活動にあたれた。そのかいあって、やっとおばあさんを救出したときは、みんな喜んで自然に拍手がおこった。次は娘さんの番。「助けて!」の声は聞こえる。が、コンクリートの壁に阻まれ



私教連事務所の近くでもビルが倒壊



て救出できない。鉄棒がれきを除き、窓を破って穴を掘っていく。45度傾いたマンションがいつ倒れてきてもおかしくない状況下での手作業だった。（よく中へはいったものだ、今思い出してもぞっとする）。ようやく娘さんのところにたどり着き手と手が触れた。「やった」という満足感は何とも表現できない気持ちである。

もちろん救出できた喜びの体験だけではない。遺体として搬出されたときには、自分たちだけ助かって悪いなあという何ともいえない複雑な気持ちになったものだ。特にガレキの下から声も出せず、最後の力をふりしぼり、「コン・コン」と壁を打って助けを求めていた神戸大学の学生さん（彼は『親愛なるお母さんへ』という手紙を書いていた）を救出できなかったことが今でも心残りである。「コン・コン」という音は今でも耳からはなれない。

今回の震災は私にいろいろな感慨を与えてくれた。妻の「お父さん助けて」の声に、生きていると安心したこと。息子の「お父さん大丈夫か」という声に勇らしさを感じたこと。いつ捨てようかと思っていたテーブルが、倒れてきたタンスの支えになって、娘が助かったこと。たくさんの「死」を見すぎたため、死の重みを感じられなくなるのでは、と思ったこと。生と死は紙一重だなと感じたこと。

そして、最も大切なことは家族の絆であり、人と人との絆である、と感じたことである。

武庫女子大学附属中・高等学校 北角 章雄



倒壊したマンション（西宮市）

私のボランティア体験

まさに青天の霹靂であった大震災によって、我々は想像もしていなかった多くの体験をすることになりました。

学園も我が家も、幸い震災による被害は軽微なもので済み、学園も震災発生の一週間後から、授業再開に向けて動き出し、当初は午前だけの短縮授業として学校生活を送れるようになりました。もちろん、生徒や保護者の中には甚大な被害を受けたために、避難所生活を余儀なくされたり、登校できない生徒もいました。一人、また一人と学校に戻ってくる生徒が増えてきた一月末に、学校周辺のガス供給停止も解除され、平常通りの授業が再開できるようになりました。

しかし、神戸を中心とした被災地の状況は、なお厳しいものであることは、連日の各種報道を通して知るところであり、なにかできることはないかと思いました。そのようなとき、避難所となっている学校では、教職員が泊まり込みで活動しており、日がたつにつれて、疲労が重なってきたという新聞記事に接して、学校であれば私にもできることが見つけれられるかも知れないと考え、そのような避難所を活動の場にしようと決めました。授業は、高校三年生を担当していましたので一月末で終了

し、また、震災の影響で高等学校・中学校ともに入学試験の日程が変更されたために、入試事務にも余裕ができたことも、決断を容易にしたと思います。学校長に一週間の職務専念義務免除を申し出て、二月六日に被災地へ向かいました。以前、神戸市東灘区に住んでいたこともあり、区内の学校を数校訪れ、ようやく母校でもある御影高校でボランティアの一員として活動することになりました。御影高校の状況は、校舎が被害を受けて使用不



神戸ハーバーランドの地割れ



救援物資が届く

能となっており、利用可能な一部の教室や体育館は被災された方たちで一杯であり、グラウンドにもテントが建てられていました。私も体育館二階の一隅に寝泊まりしながら、仕事を手伝うことになりました。

救援物資の配給、飲料水の確保、薪の確保など実に様々なことが必要であることを知り、便利さの中にどっぷりと浸かっている自分の生活を改めて見つめ直すことができたような気がします。自衛隊の給水車が到着すると、タンクの水を一ハリットルのポリ容器に入れていく作業が始まります。また、グラウンドに設けられた簡易風呂用の水も必要であり、水の確保は大変な作業でした。

学校の近くで被災され、避難所で料理長を務めておられた方が、倒壊した自宅の梁や柱を調理のための薪に利用しようとトラックで取りに行くのを手伝いましたが、瓦礫の中から柱を引き出すと、その下から写真を入れた箱が出てきて、料理長が思わず駆け寄られ、我々もその付近を掘り返さずにはいられないということがありました。

一週間というあまりにも短い期間ではありましたが、少しは避難所の様子を肌で感じることもできたのではないかと思います。同時にこのような活動を行うには、一週間は短かすぎる。もっと日常的に活動する必要も痛感しましたし、被災された方への対応や配慮、さらにはボランティアとは、あくまでも自分自身のための活動であることを再認識させてくれた一週間でもありました。

死ぬというものの怖さを体験して

一月十七日午前五時四十六分に僕は、目が覚めた。突然大きな地震がきたので、びっくりした。二十秒から三十秒ぐらい続いたと思う。僕は、電気をつけようとしたけどつかなかった。家族で集まって、ラジオを聞いていた。そして昼ごろになって僕が「おばちゃんの家大丈夫かな」と聞いたら、「押しつぶれようかもしれないな」と父が言ったので「ちよつと見に行こう」と言った。おばちゃんと言うのは、僕のおばあちゃんの妹で、おばあちゃんが死んでから、僕のおばあちゃんの代わりみたいな人だ。家は、長田区の大橋に住んでいる。僕の兄貴が見に行ってくれた。そして三時ごろ帰ってきて、突然「おばちゃん死んだぞ」と言ったので僕は「うそやろ。今どこにおるねん」と聞いたところ「家の下じきになつとるねん」と言った。パツと見るとおっちゃんがいた。おっちゃんは、近くの人たちにひっぱり出されたらしく、後頭部にけがをしていた。そしておっちゃんが泣きながら「栄人、おばちゃんを助けてやってくれ」と言った。僕は泣きそうになったけど、ぐっとこらえて、「おっちゃん、僕がおばちゃん助けてくるから待ってや」と言った。僕と兄貴と父が車に乗り込み兄貴が「栄人、遊びとちゃう

ぞ、俺らも死ぬかもしれないへんぞ、ええか」と言ったので、「ええわい」と言った。

ふだん通っている道がつぶれているので、抜け道を通って二時間ぐらいで着いた。木造の家だったのでべっちゃんこにつぶれていた。僕は泣きそうになってしまった。正月に行った時は、りっぱに建っていたのでそんなに簡単につぶれるもんかと思った。そして家の近くまで行ったら、手のつけようがない。屋根が傾いて、いまにも落ちてくる様子だった。けどここで何もしないわけにはいかない。おばちゃんが挟まれたままだ。けど、どこにいるのか全然分からない。ちよつとずつ、壁をどけて、いらん物を向こうにどけて、少しずつ入っていった。いつ余震がきて屋根が落ちてくるか分からない。屋根が落ちてきたら絶対に死ぬ。でも早く助けてやりたいという気持ちの方が大きかったので、どんどん入っていった。仏壇があったのだが、それもべっちゃんこになっていた。そして引き出しが見つかって、その中通帳が見つかった。瓦や壁をちよつとずつちよつとずつどけていったが見つからなかった。日が暮れて真っ暗になったので、ひとまずひきかえすことにした。僕は、帰る時、泣いてし

まった。大好きなおばちゃんはまだ家の下じきになっているので、とても悲しくなった。胸が痛かった。僕が兄貴に「やっぱりもうだめかな」と聞いたら、「助かっている確率は0%やな」と言った。僕は、それを聞いた時、また涙が出てきた。自分の家に着いて、僕はおっちゃんに、「ごめん、おばちゃんどこおるか分からへんわ」と言った。おっちゃんは何も言わなかった。

次の日、父の会社の人三人と兄貴二人と父と僕、七人でまたおばちゃんの家に行った。車が全然動かない。すごい渋滞だ。長田区まで行くのに、二時間近くかった。父の会社の人は、プロの人だ。解体作業するのが仕事だ。そして家に着いてすごい勢いで家を解体していく。そして足が出てきた。寝ていた場所が分かった。そして柱をチェーンソーで切っていく。すごい作業だ。そして



柱を切っていくにつれて、屋根の瓦が落ちてくる。もし大事な柱を切ってしまったら屋根が落ちてきて、七人とも死んでしまう。僕は、この時、死ぬということの怖さを体験してしまった。ものすごく怖かった。屋根が落ちてきたらぺっちゃんこになってしまう。少しずつ壁を壊して上の物をとっていく。一時間ぐらいたってから、レスキューの人たち五人が来てくれた。そして十二人で一つの家を壊して、おばちゃんを出した。もちろん死んでいた。十二人で二時間もかかる作業をした。僕は、もう涙が枯れてしまっていたので涙は出てこなかった。そしておばちゃんを毛布でくるんで畳の上に寝かした。道を通る人達がこちらを見ている。僕はすごく腹が立った。僕は、「見せもんじゃないねんぞ。殺すぞ」と言いたかったが言わなかった。そしておばちゃんを家のワゴンに乗せて、村野工業に向かった。村野工業に着くとびっしりの遺体があった。僕は、この光景を二度と忘れることはないと思う。

そして今一月三十日、おばちゃんもう骨になって天国へ行った。僕の家も落ち着いている。おっちゃんの傷もたいしたことはなく、僕の家と一緒に暮らしている。五千人以上の死者を出した今回の兵庫県南部地震が、僕はとても憎いです。そして肉親を失ったので、僕はこの地震で知った悲しみ、憎しみ、死ぬことの怖さはもう二度と忘れられないと思う。

◆ボランティア活動について

①参加して感じたこと

☆みんなのためにもちつきをした。年配の人がもち米のこねかたなど、今までやったことのないようなことをいろいろ教えて下さった。

☆遠方から参加されていたボランティアの人と友達になった。

☆避難所でのニーズが刻一刻と変わっていくなかで皆に均等にといいことの難しさを感じた。

☆水の配給をした。老人や病人の家に配った。

☆夜、放火されないように見回り隊をつくって巡回した。

☆リーダー的な人達が職場に戻ってしまってから調整がうまくいかず大変だった。

②受けた側の感想

☆ボランティアの方達のおかげで、生きる勇気が出てきた人達は、数え切れないほどいると思う。

☆とても頼りになった。勇気づけられることもしばしばだった。

☆全国から集まり、テントで合宿をしながら活動している人々のパワーに圧倒された。感動した。

☆ボランティアの若い人の中には、遊びに来ているような気分の人もいた。

☆人の弱みにつけ込んでだますような人がいた。



兵庫私教連事務所内は本棚がたおれ、書類などが散乱。

☆中には人を助けるといふより、自己満足を得ることが目的になってしまっている人もいた。



神戸市、兵庫区で

◆ライフラインが寸断された中での
ちよつとしたアイデア

①水

☆ペットボトルが大変役立った。

☆川や山の水を汲みにいった。雨水をもらってトイレ用にした。

☆ウエットティッシュで手や顔をふいた。

☆食器洗いができないので、食器にラップをかけた。

☆リュックが水くみに大活躍した。

②電気

☆結婚式の大きいろうそくが長持ちして良かった。

☆暖房にホカロンは大切だ。

☆情報を得るためにトランジスタラジオは欠かせない。

③ガス

☆ガスボンベを使った。

☆キャンプ用具が大変役立った。

④足

☆小回りの利く乗り物がよい。

☆自転車がい。

☆とにかく自分の足で歩くこと。

⑤その他

☆電話は一〇六コレクトコールがよくつながった。

☆温かい食べ物はまさに天国、インスタントラーメンさえも。

☆保存食は大切である。十分に玄関か窓のところに置いておくこと。

☆タンスを段ボールで作った。

☆学校に行けない生徒のため避難所では勉強会が開かれた。

☆お風呂に入れないので、レンジでタオルを熱くして身体を拭いた。

☆パソコン通信が役に立った。

フォト



阪神・淡路大震災5・14全国集会に大阪からも参加



すすめる会総会で「震災、人の心は」の講演を聞く



阪神・淡路大震災5・14全国集会 神戸、ハーバーランドで開催

輸送ボランティアをして思ったこと

中央区の実家に泊っていた息子は、ガラスの破片が足に刺さり、病院で手当てをして貰うという事もあったが、実家の後片付けを手伝った後は、ラジオで得た情報をもとに、荷物の仕分け作業のボランティアに行った。そこで三時間近く過ぎた頃、メンバーの一人が「こんな仕事で一万円も貰って悪いなあ」と言っているのを聞きびっくり。アルバイトで来ている人も居る事が分かって腹を立て、その足で市役所へ。そして四か所廻って、やっと行き先決定。山手から自転車で阪急六甲近くの配水管理事務所まで行き、給水車の広報係としてふれ歩く仕事をした。三日間だけだったが、水を汲みに来る人も様々で教わることも多く、感じることも多かったようである。

学校に行けなかった息子は受験そっちのけで、何かしなければならぬと言う思いに駆立てられたようであるが、勤めのある私は、土、日を利用して、水が使えない実家の洗濯物を引き受けるのが精一杯であった。

職場である養護学校では、放課後、り災した同僚の為に、何十個というナイロンの小袋に水を詰めたりした。避難所になっている学校に勤めている元同僚から、必要な物を聞き、持寄りの声掛けが始まった。職場で集めた



救済物資のはこびこみ

義援金の一部は、被害の最もひどい養護学校に届けられた。必要とする物が刻々と変わって行く。紙おしめに困っているという情報があれば、グリーンピア三木に行けば有ると言う情報も入って来る。聾学校、養護学校、病院、避難所の必要とする物を聞いては、週一度、三時半過ぎ、車一〇台余りを連れ、二キロ離れた救済物資センターまで渋滞にひっかかりながら、七時頃学校に帰着、荷物を降ろし、それを土、日に届ける。届け役はもっぱら若い人が中心になってよく動いていた。

土曜の午後は、調理室で豚汁の材料切りをし、日曜日

に避難所で温かい物を作る。今週末は筑前煮を作ることになっており、材料を持ちよることになっている。材料を提供したり、労力を提供したり、それぞれ自分に出ることを見つけて、役に立とうとする姿が見受けられる。救援物資の輸送は、週一回定着して行っているが、広大な場所に山積みされた品々が、どこまで行き渡るのだろうか？と言う不安にかられてしまう。物資を取りに行く我々だって、同じ配布するなら新品をと思う。善意で寄せられた品だが中古はどうしても残ってしまう。

「学費が払われへん」

「先生、公立へかわるのはどうしたらいいんですか。」高校一年生のE子が今にも泣き出さんばかりの面持ちで私のところにやってきた。震災からちょうど一か月後の登校日のことである。生徒会で意欲的に活躍していた今までの姿からは想像もできないくらい暗く沈んで思い詰めたような様子だった。彼女は涙をこらえながら必死で事情を話した。父親が勤務していた印刷会社が大きな被害を受け、営業再開のメドが立たず、給料の支払いもどくなるか分からない。とてもじゃないが私学の授業料を支払うことはできないという。本人はともこの学校が気に入っているし、友達とも離れたくないので学校をか

必要な物も刻々と変わって行き、ポリタンクも行き渡ったのか、文字通りの山積みである。古い傘や衣類の行方を思うと胸が痛む。

り災直後、飲料水を入れる為のペットボトルが必要と聞き、即、百本集めてくれた学校、それを遠くまで受取りに行ってくれた人たち。いろいろな所で人々の善意が動く。全国から寄せられた救援物資の山、善意の山が無駄にならないよう、微力ながら手伝って行きたい。

神港学園神港高等学校父母 篠下 節子

わるのはいやだという。しかし、家で話し合いをした結果、転校を受け入れざるを得ないと納得したらしい。そこで、何とかしてこの学校を続けられる手だてを考えようということ、とりあえず、日本育英会の震災特別奨学金の申込手続きをさせた。育英会の補助は月額二万五千円の貸与。これでなんとかならないか。家と連絡をとったが、他にも借金があつてギリギリ最低限の生活をしており、もし会社が倒産すれば返済にも困るので金はこれ以上借りたくない、という返事。職がなくなるかも知れないという危機感は予想していた以上に強く大きな衝撃を与えていたのである。

学校では授業料の納入が困難な生徒に対して授業料の減免を検討するための委員会が設置された。授業料の減免措置が行われることになれば、E子も当然、減免を受けることができるだろう。彼女も学校を続けることができる考えた。ところで、授業料の減免は、県からの補助を当てにして考えられていた。学校宛に送られた義援金を含めても、とても学園の財政だけでできる事業ではないからだ。しかし、県からの補助を受けるためには県の基準をクリアしなければならず、そのためには公的機関の発行した罹災証明が必要だった。第三項目に「特に知事が必要と認めた場合」というのがあったが、範囲や基準が曖昧で、どこまで知事が補助を認めてくれるのかどうか分からず、学校でも県の基準に確実に該当するものだけを減免措置にしようという方向で考えられていた。県からの補助に頼らずに減免措置をするのは、ただでさえ経営難の私学にとっては予算の裏付けがとれず、自殺行為になりかねない。授業料減免についての検討委員会では、県の基準にのっとり、主たる生計者の死亡、自宅の全半壊、全半壊の家庭については一年間の学費免除を決定した。しかし、罹災証明のない家庭は切り捨てられようとしていた。

E子の家は、ポートアイランドの高層住宅で、壁面に亀裂が入っているのだが、ポートアイランド地区は被害が比較的小さいということで罹災証明は出ないということとだった。住居は破損し、収入の途も見通しがたない。



5月19日、復興署名を積み上げ、県教育課と懇談

なのに罹災証明は何一つ発行されないのである。授業料の減免に限らず他の補助や援助も受けられずに苦しんでいるのであった。

委員会では、その後、E子の家庭以外にも、復旧の見通しのたたない神戸港を職場とする家庭、自営業で店の営業ができない家庭等、同じような家庭の状況が数多く報告された。そして、「住居の損壊はたしかに大問題ではあるけれども、救済が必要なのは、そういう目に見える部分での判断だけではだめだ。失職や収入減などで苦しむ家庭にこそ、証明書にしばらくられない学校独自の援助をするべきではないのか」という意見が強くなってきたのである。「補助の見通しのない減免をして我々の給与や生活は大丈夫なのか」とか、「財政の裏付けは一体どうするのか」等の慎重論もあったが、最終的には学校として救済しようということが決定された。財源は義援金を最大限活用し、学校も出資に協力するということになったのである。一年間の免除は無理であるが、半年間の免除が認められた。どの家庭に援助するかは、家庭と教員との関わりの中で得られた状況や情報を委員会で報告し、できるだけ客観的に判断しながら決めていくことになった。

E子の家は免除が認められることになり、早速E子に連絡をとった。「半年は学校でめんどう見るから、あとは育英会の奨学金でなんとかならないか。本当に学校をかわりたくないのだったら、『奨学金は私が卒業後に何



全国から集められた41万署名
5月18日に大蔵省に提出

としてでも返して行くから』ぐらいのことをいって親を説得して見ろ。」そして、彼女は学校に残ることになった。震災から六か月、E子の父親の勤める会社は倒産の危機を脱したわけではなかったが、給与の支払いは大幅ダウンしながらも何とか継続している。E子の家庭も精神的な落ち着きを取り戻してきた。未曾有の災害に遭い、先の見通しがたたないとき、誰でも極度の不安に陥ってしまう。しかし、そんなときこそ、学校がすぐに「心配するな」といってやれたら、もっと大きな力になれたのではないかと思う。しかし、そのためには私学に対する県の援助、ひいては国の理解と迅速な支援態勢が不可欠なのである。

被災生徒の教育権を守る取り組み

―神戸野田高校における授業料等減免措置―

一、文部省は、一月十九日、被災生徒の授業料・入学金の免除の方針を打ち出し、県教委も一月末に、被災した高校生と中学3年生に対して授業料等の免除を決定。免除の対象は、住居が全・半壊か全・半焼、主たる生計者の死亡、失業などにより世帯収入が著しく減少等で生活が困難になった者。期間は一月から十二ヶ月以内。全額免除で校長が決定することとなっている。

二、二月に入って、私学（高校）でも減免の動き。神港（2/8）、三田（2/13）、松蔭（2/13）で実施の決定。

三、本校では、一月二十三日、二十六日、三十日の三度、教職員の打ち合わせを行い、生徒の安否確認、入試、一月いっぱいの休校等に関わる当面の方針の決定。

組合は二十三日に理事会から回答された六年度給与改定を臨時総会（1/26）で妥結を決定するとともに、二月五日集約でアンケートを実施し、公立高並の学費等減免措置を柱とする要求をまとめ、七日校長へ提出。その後、再三にわたって校長へその実施を要求。あわせて、私教連書記局と連絡をとりながら、教育課への

要請行動を計画。二月十五日には私教連役員とともに、県総務部教育課第一係長と会い、私学における減免の必要性を強く要請。私学での減免の実施、各学校への通知の時期等について前向きな回答を得る。教育課は、二月二十日、「私立学校における入学料・保育料等の軽減に対する特別対策について」を各校へ通知。

財政上の具体的な裏付けがない、新聞情報やそうなりそうだという見通しだけでは動けない、他校の様子を見てから等と極めて消極的な姿勢を示していた校長に軽減実施を決断させることとなった。二月二十一日、職員朝礼で県通知の要件一、二（学資負担者の死亡、三カ月以上の長期入院、住宅の全・半壊、全・半焼）該当者の調査を指示。二十二日職員会議で平成六年度一・三月の軽減措置を提示。二十四日には、要件一、二以外の理由で軽減を希望する者の調査を指示。二十六日の卒業式を翌日に控えた二十五日、ようやく、学校としての正式な姿勢を生徒・保護者に示すことになった。この間、組合は校長に対して、軽減の具体的な実施案の提案を含めて、執拗に要請を行った。



6月27日、近畿ブロック中央行動へ
兵庫からの参加者

平成6年度授業料等軽減措置

(2月25日付)

(1)軽減対象者

- ①学費負担者(保護者)が死亡
- ②学費負担者(保護者)が3ヶ月以上入院
- ③学費負担者(保護者)の住居が全・半壊、
全・半焼

(2)必要書類

- ①については住民票(死亡事項記載のもの)
- ②については医師の診断書
- ③については災証明書

(3)軽減期間 平成7年1月から3月まで

(4)軽減金額 40,500円～67,500円(授業
料教育充実費の全額)

(5)対象人数

1年生	100名	
2年生	80名	
3年生	81名	計261名(19%)

(6)財源 8割は県助成(国から1/2)

平成7年度授業料等軽減措置

(3月20日付)

(1)軽減対象者 必要書類は6年度と同様

(2)軽減期間 平成7年4月から12月まで

(3)軽減金額

新入生 最高額 619,100円(受験料、
入学金、授業料、教育充実費
の全額)

新2・3年生 最高額 206,100円(授業料、
教育充実費の全額)

(4)対象人数

新入生	101名	
新2年生	118名	
新3年生	91名	計310名(24%)

(5)財源 8割は県助成(国から1/2)

四、その後も、七年度分の実施に関わって、災証明書
提出の問題、要件一、二項目以外のいわゆる第三項目
(その他、特に知事が必要と認めた場合)特例措置の
扱い、その財源等について協議を繰り返し、組合とし
ては完全に納得できない部分を残しながらも、現在に
至っている。

五、二月二十日の教育課通知以降、仁川、神戸学院、雲
雀丘、神戸弘陵、啓明、育英等多くの私学で軽減措置
を実施している。第三項目の扱いについても本校以上
に生徒・保護者の立場で工夫をしている学校もある。

六、まとめにかえて
 わたしたちは授業料等軽減を実施させるこの運動を被災生徒の教育を受ける権利を守るたかいと位置付けて粘り強く取り組んできた。多くの不十分さを残しながらも、ほぼ公立並の軽減を実現し、三〇〇名を越す多くの生徒へ適用させることができたことを貴重な成果として評価したい。

神戸野田高校教職員組合執行委員会



6月27日、近畿ブロック中央行動
 文部政務次官室で

授業料等特別軽減措置

(4月14日付)

(1)軽減対象者

被災によって、学資負担者が学資等の納付が困難になった場合で次の要件を満たす場合

- ① 勤務先の企業（会社・商店）が被災したために失業または収入が激減した場合
- ② 学資負担者の経営する会社・商店が被災（全壊・半壊）し、収入が激減した場合

(2)添付書類

上記の要件を証明する書類

(3)軽減期間 平成7年1月から12月まで

(4)軽減金額

6年度 20,250円～33,790円

7年度 最高額 103,050円

(ともに授業料、教育充実費の半額)

(5)対象人数

6年度（1月～3月） 計19名（1.4%）

7年度（4月～12月） 計7名（0.5%）

(6)財源 私学救援カンパ、野田高校組合カンパ、野田高校PTA会費



全国からの義援金を被災私学に手渡しました。
 （右から二人目、全国私教連平形氏）

◆避難所生活をしている人（六月現在）

○狭い場所にたくさんの方が生活しているため、清潔に保つことが必要だけど、難しい。空気が悪く、お年寄りには良くない。

○現在も体育館で生活しています。プライバシーがなく、夜中にトイレに行くのも気を遣います。少しの風邪でもすぐに蔓延してしまいます。

○避難所というところは元気な人から出ていく。身よりのある人も出ていく。結局残っていくのは弱者だ。

○精神的に限界が来ています。もめ事がたえません。大人でもちよつとしたことで争います。

◆避難所で快適に過ごそうとした知恵

○池の水をバケツに汲んでためておき、水洗トイレで用を足した後、その水で流す。水を使ったらまた汲みに行く。プールの水がなくなった後は、トイレにビニール袋をかぶせてその中に用を足し、いっぱいになるとそのゴミ袋を取り替える。

○畳の代わりに発砲スチロールや段ボールを敷いてそのうえに布団を敷き、寒さをしのいだ。また、床にクッションを敷いた。

○男と女、それぞれに適している作業を振り分け、男

はゴミの後始末、女はトイレ掃除。ゴミは一日に大量に出るので、生ゴミと普通のゴミとに分け、普通のゴミは学校の焼却炉で処理し、生ゴミは運動場に大きな穴を掘ってそこに捨てた。トイレは、マナーが悪く大きな問題の一つであった。

○明かりはローソクが役に立ち、暖房は練炭が良かった。

○できるだけ人ともめごとを起こさず、人のためにつくすようにした。

◆仮設住宅で生活している人

○すぐく響くので、長い間いられないように思う。

○老人には長年培った、近所付き合いが必要なのでしよう。仮設で自殺する老人の気持ちがかかるような気がします。

○仮設をいやがる人がいるけれど、住んでみるとなかなかいいものだ。これなら早くくれば良かった。

○少々不便でも家族のスペースとして確保されていることが精神的には楽である。

資 料

1995.2.20.

私立学校における入学料・保育料等の軽減に対する特別対策について

兵庫県教育課発

1. 趣 旨

被災した私立学校の生徒等が経済的な理由で勉学を続けるのが困難となるのを回避するため、私立学校が入学料・授業料等の軽減を行わざるを得ない状況になっており、このような苦しい財政状況の私学に対し、軽減特別対策として財政的な支援を行う。

対象は、学校法人立の幼稚園から高等学校（方法は経常費補助）、非学校法人立幼稚園（方法は県単補助）とする。

2. 支援軽減対象者

兵庫県南部地震により、入学料や授業料等の学費の納付が困難になった生徒等の学費負担者

〈要件〉

- (1) 学費負担者が死亡、3ヵ月以上の長期入院となった場合
- (2) 学費負担者の住宅が、全・半壊、全・半焼した場合（罹災証明等で確認）
- (3) その他、上記に準ずるもので、特に知事が必要と認めた場合

3. 支援方法

入学料・授業料等の軽減を行った学校設置者に県が経常費補助金又は保育料等軽減特別対策補助金を交付することにより学校運営への支援を行う。

4. 補助金配分方法

次に定める納付金に対し支援軽減単価以内で学校が軽減した額の80%（5月1日の在校生に占め軽減対象者の割合が20%以上の学校については、20%以上30%未満分は85%、30%以上40%未満分は90%、40%以上分は95%とする）に対象者数を乗じて得た額で配分する。

- (1) 平成7年4月に新たに入学する者（編転入によりこれに準ずる者を含む）の入学料等入学時納付金
- (2) 平成7年1月分から7年12月分までの授業料等経常時納付金

5. 支援軽減単価

平成6年度県下平均の入学時納付金・経常時納付金による。

この金額を下回る場合は、その額までとする。また、県が行う高等学校授業料軽減、市町の行う幼稚園就園奨励費補助事業による軽減を受ける生徒については、これらの軽減額を控除した後の額とする。

（単位：千円）

区分	高 校	中学校	小学校	幼稚園
入学時納付金	340	380	510	60
経常時納付金（月額） 〔年額〕	28 [336]	31 [372]	31 [372]	18 [216]

私立中高の被害状況・学費減免状況

9月段階での再調査協力校18校分

学校	校舎設備等の被害金額	95年度 中高生徒数	学費減免を受けて いる生徒数	学校での減免 金額合計(円)	県からの補助額 推 計 (円)	学園独自の救済措置など
A 校	約 600万円	1197	1 7 2	41,835,000	33,468,000	特になし
B 校	学園全体で約30億円	2781	6 3 6	219,497,000	175,597,600	全・半壊(焼)者に見舞い金支給
C 校	約 25億円	1107	3 5 0	47,743,200	38,194,560	
D 校	約 5000万円	1826	4 7 2	158,141,250	124,637,400	学園独自の奨学金を設けている
E 校	約 2300万円	1300	5 0 2	152,221,600	121,729,575	制服等の援助
F 校	約 5000万円	1410	2 3 5	51,321,900	28,184,914	特になし
G 校	約 1億円	1014	4 5 3	106,413,750	85,831,700	95年度入試併願合格者の前納分免除
H 校	約 600万円	1534	5 0 4	153,406,300	122,725,040	全壊家庭への見舞い金支給。各種奨学金の給付
I 校	約 7億1100万円	659	1 1 7	43,673,400	34,938,720	特になし
J 校	約 2億5000万円	1083	2 9 8	71,000,000	53,000,000	全・半壊者の入学校定料免除
K 校	約 1億円	1276	3 6 2	115,848,500	92,678,800	家計の減収などの場合 PTA等義援金から
L 校	約 1億3200万円	1305	3 4 4	103,993,600	76,401,800	家族の死亡に対し見舞い金支給
M 校	約 1300万円	1187	2 5 9	80,760,250	57,661,112	
N 校	約18億8900万円	1151	5 4 6	143,617,075	105,952,340	
O 校	約 6億5000万円	1584	4 0 4	103,632,900	82,906,320	経済的困窮者には独自奨学金で救済
P 校	約18億3000万円	1908	5 1 6	64,797,450	51,837,960	
Q 校	約 1億800万円	1370	2 7 4	45,073,650	36,058,920	特になし
R 校	約 2億4500万円	2262	5 7 9	140,130,450	104,077,040	

＊ 学費減免特別措置を受けている生徒数には、1995年3月の卒業生該当者も含んでいます。

＊ その他、数字(金額)等については、編集委員会で整理・計算した学校もあります。

被災生徒を励まし、私学の一日も早い 正常な教育の再開に向け、英知を結集しよう。

あの大震災の日から二ヶ月たった今でも、痛ましい傷跡が残り、人々のかなしみや苦しみに満ちた思いが、うめき声となって聞こえてきます。兵庫県南部地震は、戦後最悪の大震災となりました。

私学に学ぶ六一名の子供たちも、一瞬のうちに尊い生命を失いました。

私たちの働く職場も、大きな被害を受けました。甲南中高校をはじめ、多くの学校が大きな被害をうけ、高校以下の私学の被害総額は、三四〇億円にも上ります。自助努力の限界を超えるものです。この事態の中でも政府は、私立学校の施設復旧に、二分の一しか補助しようとはしていません。

都市型大震災に、人類がどのように対応していくのかは、今後の政治の最大の課題であり、同時に、震災による甚大な被害から、一刻も早く再生していくのも、政府・行政の

最大の責務です。

私たちは、この間、被災生徒への学費減免措置の実現に力をそそぎ、被災生徒への大きな励ましとなっています。

また、神戸市の奨学金でも特別の措置が取られました。

復旧・復興はこれからです。教育現場はもちろん、人々の生活にさまざまな困難が生じることは明らかです。

一日も早く生徒が安心して通え、学べる学校への再生のために、知恵と力を最大限に発揮しましょう。また、生徒・父母、教職員そして経営者とも協力しながら、政府・自治体にその財源保障を求めて、取り組みをすすめましょう。右、決議します。

一九九五年三月一九日

兵庫県私立学校教職員組合連合

第三四回 臨時大会

あ と が き

この冊子は兵庫の私学に集っている生徒と教職員、父母によってできました。その人たちの文章を読んでいると、人と人とのつながりの大切さをもう一度知らされます。

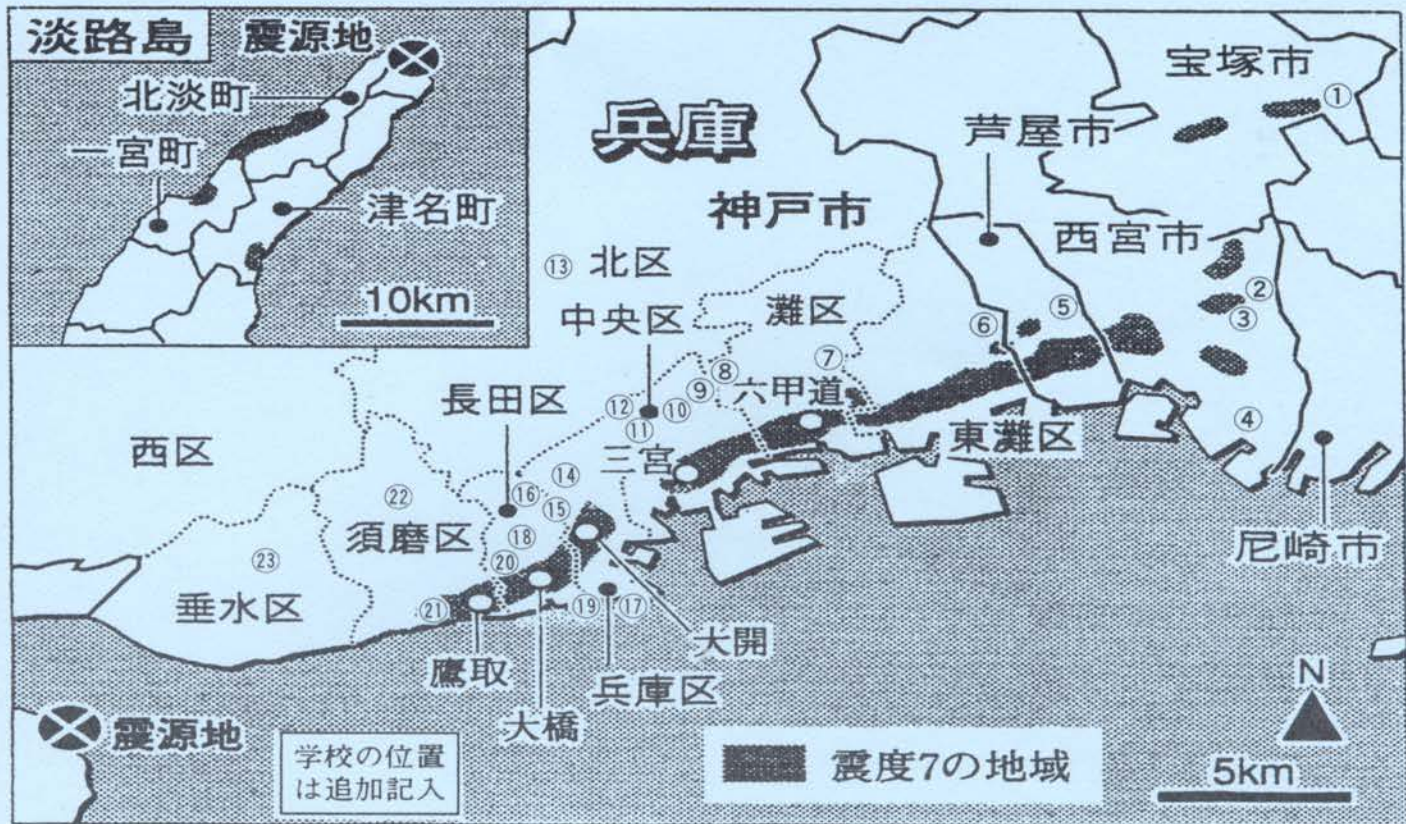
そういえば震災直後、倒壊した駅舎では、駅員がガマ口かばんをぶらさげ、切符を売りながら「有難うございます」と言うのを耳にしました。また、信号機をつぶれた交差点では、全国から応援に来た警察官が手信号で交通整理をしていました。「機械化されるときに便利に、さらに正確に、さらに安くなる」と教えられた私達は、それに適応する人材を育てるのが教育と思うところがあります。しかし便利でないかもしれない、正確でないかもしれない、高くつくのかもしれないけれど、そこにも大切なものがあることを学びました。そして私達は、まさにその「人間」を育てる仕事に就いていることを改めて思い起こし、教育の大切さを痛感しました。

震災が起こって九ヶ月。この冊子をみなさんにお送りします。私達の体験したことを、みなさんの普段の生活の中で役立てて下されば幸いです。

一九九五年十月

●
兵庫私教連
冊子で伝える大震災編集委員会

大きな被害を受けた私学



(95.2.8 神戸新聞)

- | | | |
|-------|---------|----------|
| ① 雲雀丘 | ⑪ 神 港 | ⑳ 須磨ノ浦 |
| ② 報 徳 | ⑫ 山 手 | ㉑ 啓 明 |
| ③ 仁 川 | ⑬ 神戸弘陵 | ㉒ 神戸国際大附 |
| ④ 武庫川 | ⑭ 神戸学院 | |
| ⑤ 甲 南 | ⑮ 村 野 工 | |
| ⑥ 甲南女 | ⑯ 常 盤 | |
| ⑦ 親 和 | ⑰ 神戸女子商 | |
| ⑧ 松 蔭 | ⑱ 育 英 | |
| ⑨ 成 徳 | ㉓ 野 田 | |
| ⑩ 塩 原 | ㉔ 滝 川 | |